The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『十七番詩歌合』注釈
Author(s)	海野, 圭介; 滝川, 幸司
Citation	詞林. 1996, 19, p. 3-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『十七番詩歌合』注釈

海野　圭介
滝川　幸司

凡例

一、「翻刻」に記した本文は大阪青山短期大学蔵本を底本として正確に翻刻することにつとめた。底本の字形が曖昧であり判読困難な場合は最も近いと判断した文字を［　］を付して記した。なお、表題には『十七番詩歌合』としたが、底本の現存は十四番までである。詳細は「解説」を参照されたい。

一、「注釈」は以下の手順で行った。

・本文は、漢詩は校訂した場合もあるが、校訂の方針については、その旨、各語句の【語釈】欄に示した。和歌は適宜漢字をあてた。

・【平仄】欄では漢詩の平仄を平水韻で示した。

・【語釈】欄では適宜取り上げるべき語句に解説を施した。その際、底本のままでは意が通じ難い箇所があればその旨を指摘し、想定し得る解釈を記した。

・【通釈】欄では底本に従った口語訳を載せた。なお、底本のままでは意が通じ難い場合は、【語釈】欄に記した想定本文による解釈を記した。

・【作者】欄では底本に作者名が記される場合はその作者の、官職名等の表記の場合は想定される作者の略歴を記した。

・【付】欄では以上の欄で取り上げ難かったことで、解説すべき事柄について記した。

一、和歌の引用並びに歌番号は『新編国歌大観』によった。また、【語釈】の欄に引用した歌の作者は官職等による表記を避け、姓名等の簡略な形に改め、作者不明歌については一括して「読人不知」とし、加えて詞書を省略した場合もある。なお、歌

集等の名称は概ね『新編国歌大観』の名称に従ったが、『古今和歌集』・『夫木和歌抄』等はそれぞれ『古今集』・『夫木抄』等の略称を用いた。

一、漢詩、漢文資料の引用については、以下によった。

『毛詩』『礼記』―『十三経注疏』(芸文印書館版)、『文選』―『文選付考異』(芸文印書館版)、古訓は『九条本文選古訓集』(風間書房　昭和五十八年二月)、『庾信集』―『庾子山集注』(中華書局版)『李嶠百詠』―『李嶠百二十詠索引』(東方書店　平成三年三月)、『白氏文集』―『白氏文集歌詩索引』(同朋舎出版　平成元年十月)、『元氏長慶集』―『元稹集』(中華書局版)、『芸文類聚』『初学記』―『芸文類聚』『初学記』(中華書局版)、李白は『唐代研究のしおり　李白の作品』(同朋舎出版　昭和五十二年十一月)その他唐代の詩は『全唐詩』(中華書局版)、史書は点校本二十四史(中華書局版)、『文華秀麗集』―『日本古典文学大系69　懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』(岩波書店　昭和三十九年六月)、『田氏家集』―『田氏家集注　巻之上・中・下』(和泉書院　平成三年二月～六年二月)、『菅家文草』―『日本古典文学大系72　菅家文草　菅家後集』(岩波書店　昭和四十一年十月)、『千載佳句』―金子彦二郎『増補平安時代文学と白氏文集』(芸林舎　昭和五十二年五月)、『扶桑集』―『扶桑集校本と索引』(櫂歌書房　昭和六十年五月)、『本朝麗藻』―『本朝麗藻簡注』(勉誠社　平成五年七月)、『本朝文粋』―『新日本古典文学大系27　本朝文粋』(岩波書店　平成四年五月)、身延山本訓は『重要文化財本朝文粋』(汲古書院　昭和五十五年九月)、『和漢朗詠集』―『日本古典文学大系73　和漢朗詠集　梁塵秘抄』(岩波書店　昭和四十年一月)、『新撰朗詠集』―『新撰朗詠集校本と総索引』(三弥井書店　平成六年一月)、『本朝無題詩』―『本朝無題詩全注釈一～三』(新典社　平成四年三月～六年五月)、『中右記部類紙背漢詩』―『図書寮叢刊平安鎌倉未刊詩集』(昭和四十七年三月)、『本朝続文粋』―『新訂増補国史大系』(吉川弘文館　昭和四十年九月)、『猪熊関白記紙背詩懐紙』―『和漢比較文学叢書5　中世文学と漢文学Ⅰ』(汲古書院　昭和六十二年七月)、『和漢兼作集』―『新編国歌大観』、『＜古注＞蒙求』―『蒙求古註集成　上巻』(汲古書院　昭和六十三年十一月)、『和漢朗詠集私注』―『国立国会図書館蔵和漢朗詠集　内閣文庫蔵和漢朗詠集私注　総索引附和歌断句要語索引』(新典社　昭和六十年十月)、『新楽府略意』―太田次男「釈信救とその著作について―附・新楽府略意二種の翻印―」(斯道文庫論集5　昭和四十年七月)、『楽府注少々』―後藤昭雄『平安朝漢文文献の研究』(吉川弘文館　平成五年六月)、『文鳳鈔』―『真福寺本文鳳鈔』(勉誠社　昭和五十六年三月)、その他の日本漢詩は群書類従、『類聚名義抄』は『類聚名義抄』(風間書房　昭和二十九年五月)。

一、歌学書等の引用は、『袖中抄』は『袖中抄の校本と研究』(笠間書院　昭和六十年二月)、他は『日本歌学大系』によった。

〔付記〕本注釈は、平成七年度大阪大学大学院演習における輪読の資料に基づき、海野・滝川両名により資料の再調査・増補等を行い作成した。解説も含めて文責は両名にある。また、注釈作成において伊井春樹・後藤昭雄・中本大の三氏には多くの御教授をいただいたが、それらを有効にいかし注釈に取り込むことができなかった。非才をお詫びする次第である。何分未熟な我々の注釈であるので、未詳としたままの部分も多く、誤読・誤解等多々あることと思う。宜しく御教授・御叱正を賜りたい。

最後ではありますが、貴重な資料を提供する機会を与えていただいた大阪青山短期大学学長塩川利員氏及び本学教授伊井春樹先生に心よりお礼申しあげます。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

注釈

web公開に際し、翻刻は省略しました

【韻】漢詩・和歌共に一首末尾に韻を踏み、一番おきに交互に「遺」「糸」の韻字が用いられる。「遺」「糸」は平水韻では上平第四番支韻。

【参考】底本には題・判詞が記されず、漢詩・和歌に共通する題も想定できない。漢詩・和歌双方の末尾に共通する「遺」「糸」の韻字が用いられるため、これら共通の韻字の許に左方が漢詩を、右方が和歌を賦し番えられていると考えられる。『新編国歌大観』に所収される他の『詩歌合』には、同題の許に漢詩・和歌を賦し番えられる例は散見するが、共通の韻字を用いて一番とする例は見出し得ない。なお、右方（和歌方）は左方（漢詩方）と異なり実際には韻を踏むことが不可能なため、一首の末尾に韻の文字を置き詠み込んでいる。韻字を用いた和歌は『拾遺愚草』（1601～1728「韻歌百廿八首和歌〈建久七年〉」）、『拾遺愚草員外』（607～670「韻字四季歌〈建保五年〉」）、『土御門院御集』（441～446「韻字六首」）に見える。「韻字四季歌」は、漢詩・和歌共に末尾に共通の韻字が用いられており近似する例。「韻歌百廿八首和歌」、「韻字六首」では韻字は必ずしも一首末尾に置かれてはおらず、韻字を和歌中に詠み込むことに主眼があったようである。なお、赤羽淑「定家の韻字百二十八首和歌について」（文芸研究39・昭和三十六年十月）参照。

web公開に際し、翻刻は省略しました

〈漢詩〉

【平仄】○●○○○●●　○○○●●○支

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】蘆の覆う水辺を舟がほの暗い中に棹さして急いで行く。松の生えた台から聞こえてきていた琴の音に紛う風の音もやみ、暁に舟の進む音だけが遺り響いている。

【作者】底本には「女房」と記される。井上宗雄「一条実経について付建治元年催行の歌合と詩歌合と」（研究と資料30・平成五年十二月）、同「和歌史研究について―新資料若干の紹介を兼ねて―」（国学院雑誌95―11・平成六年十一月）によれば、藤原（一条）家経が比定される。宝治二年（1248）―永仁元年（1293）藤原（一条）実経男。従一位摂政左大臣。後光明峯寺摂政と称す。『和漢兼作集』に二首漢詩が遺る。勅撰歌人でもあり、『続古今集』『続拾遺集』『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』『続後拾遺集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』に計二十八首入集。

＜和歌＞

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】益の無いことであるよ、まだ早いうちに急ぎ別れる後朝には、私の袖の上に（落ちた涙に、また次に逢うまでの）形見のように月が暫く宿っているよ。

【作者】安嘉門院四条・阿仏尼・北林禅尼とも。生年未詳―弘安六年（1283）。佐渡守平度繁養女。実父母は未詳。安嘉門院に仕え、越前、右衛門佐、四条と呼ばれた。藤原為家との間に為相、為守らを生む。為家の寵を頼みに歌道の正統を為相に伝えることを望み、持明院の北林に和歌の文書を選び出させた。為家の没後、長男為氏と細川荘の相続を争い、弘安二年（1279）には訴訟のため鎌倉へ下った。生前には判決を見ず、弘安六年四月八日に没した。『続古今集』『続拾遺集』『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』『続後拾遺集』『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』『新続古今集』に計四十八首入首。

web公開に際し、翻刻は省略しました

＜漢詩＞

【平仄】●○●●○○●　●●○○○●支

[redacted]

【通釈】雁が飛ぶ様は明瞭ではないが、雲の辺りに文字のように見える。月は、初三の弓張り月であり、山の上に糸のように見える。

【作者】一番詩注参照。

＜和歌＞

[redacted]

[redacted]

【通釈】掛かっていることだよ、軒端に生えたしのぶにも、露に濡れあらわに見えるようになった蜘蛛の糸が。

【作者】一番歌注参照。

【付】阿仏尼の和歌は、梁瀬一雄『校註阿仏尼全集』（風間書房・昭和三十三年十月）に類聚されるが、本詩歌合所収の一、二番歌は所収されず新出である。

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

<漢詩>

【平仄】●○○●○○●　○●○○●●支

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】月が苔むした道を照している。その光が霜のように道を覆って寒々としている。嵐が松の生えた巌を吹き、（それによって起きた）松風が雨の音の如く残っている。

【作者】底本、作者が記されない。

[redacted]

【付】【通釈】は先述の如くに記したが、「遺」に重きをおけば、下句は、「松風が雨の音のように聞こえていた。（しかし嵐がやんでも）雨の音が残っている。（雨もまた降っていたのであった）」とでも解釈できようか。但し、その場合、上句との均整がとれず、また上句から夜景であると考えられるので、雨は実際に降ってはいないとし、【通釈】の如く理解する。

＜和歌＞

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】父が見ていた夜の秋の形見ということで、（その頃と変わらず）月だけが、同じ光を遺している。

【作者】九条（藤原）。生年未詳―永仁六年（1289）十二月五日。歌道家六条家の子孫。行家男。従二位大蔵卿。仁治末か寛元初めの生まれ。永仁元年勅撰集（いわゆる永仁勅撰）の撰者を為世・為兼・雅有と共に命ぜられたが、中途に没す。『続古今集』『続

拾遺集』『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』『続後拾遺集』『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』『新続古今集』に計六二首入集。『和漢兼作集』に摘句が一首残る。また、八瀬切（『続古今集』）の伝承筆者でもある。なお、佐々木孝浩「九条隆博伝の考察（一）（二）―永仁勅撰撰者の生涯―」（三田国文14、16・平成三年六月、同四年六月）に関係資料がまとめられている。

【付】「たらちね」は平安中頃から「父」の同義語ともなる。この点については、片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（角川書店・昭和五十八年）参照。時代の近い例を挙げれば、「たらちねのありしその世にあはれなど思ふばかりもつかへざりけん」（『新後撰集』雑下・1518・道玄）の歌では、詞書に「普光園入道前関白かくれ侍りて後、よみて侍りける」とあり、関白（良実＝道玄の父）のことを「たらちね」と詠んでいる。隆博の父行家は建治元年正月十一日死去であるから、当該歌が実事を詠んでいるのであれば、本書は、これ以後の成立となる。また当該歌は、月を見て、故人も見ていたであろうことを思う歌であるが、同様な趣向は隆博自身も、「八月十五夜、後一条入道前関白のことを思ひ出でてよみ侍りける」の詞書で「もろともに見しよの秋の面影もわすれぬ月にねをのみぞなく」（『新後撰集』雑下・1543）と詠んでいる。

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

＜漢詩＞

【平仄】○●●○○●●　●○○●●○支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】人気のない谷の夜の窓には、落葉の音が聞こえる。うちすてられた籬の秋草に蜘蛛の糸が見える。

【作者】底本、作者が記されていない。

＜和歌＞

[redacted]

【通釈】紅色に（紅葉に染められて）変わったことだよ。紅葉が流れて落ちてきた滝の白糸が。

【作者】三番歌注参照。

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

＜漢詩＞

【平仄】●○○●○○●　●●○○●支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】白楽天の疎竹は古くからの馴染みである。召伯の甘棠には仁愛が遺っている。

【作者】藤原（一条）実家が比定されるか（解説参照）。建長二年（1250）―正和三年（1314）。従一位太政大臣。藤原（一条）実経男。『和漢兼作集』に漢詩二首が遺る。勅撰歌人でもあり『続拾遺集』『新後撰集』に計七首入集。

[redacted]

【通釈】とるに足らない水辺の藻屑のような私の文章は、そのままでは（後代）遺っていくのでしょうか（遺りはしないでしょう）。

【作者】醍醐源氏。生没年未詳。兼康男。父・兄親長（本詩歌合九、十番右に出詠）共に勅撰歌人。長舜（『新後撰集』『続千載集』撰集時の和歌所開闔・連署、『続後拾遺集』の連署を勤める）とは従兄弟。従四位上右馬助。嘉元二年（1304）兼康筆『古今集』を相伝し、松殿兼輔所持の為家本に依って校合（久曽神昇『古今和歌集成立論　研究編』風間書房　昭和三十五年所収穂久邇文庫本識語）。『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』『続後拾遺集』『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』に計十八首入集。

[redacted]

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

＜漢詩＞

【平仄】○●○○○●●　●○●●●○支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【作者】五番詩注参照。

【付】鬢毛の垂れる様を商山の雪に見立てる例も見える。「両鬢更垂商嶺雪　高縦猶継潁陽塵」（『粟田左府尚歯会詩』藤原斯生）。

＜和歌＞

[redacted]

[redacted]

【通釈】くりかへし飽き足りることなく来てみよう、天にあるよりも月の光がなお一層清く澄み渡るという（「清い」という名を持つ）清滝の瀬々の白糸に。

【作者】五番歌注参照。

[redacted]

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

<漢詩>

【平仄】○●●○○●●　●○○●○○支

[redacted]

【通釈】天の河を見上げてみると、秋の月は冷え冷えとしている。役所に礼を尋ねてみると、昔の風情が遺っている。

【作者】藤原（滋野井）実冬が比定されるか（解説参照）。仁治三年（1242）―乾元二年（1303）。公光男。宝治元年（1247）従五位上。建長元年（1249）左少将。弘安六年（1283）正二位権中納言、正応元年（1288）権大納言。正応二年（1289）出家。『亀山殿十首』（永

[redacted]

仁元年1293）の作者。大覚寺統廷臣。『鳩嶺集』に三首、『和漢兼作集』に一首漢詩が遺る。また、勅撰歌人でもあり『続拾遺集』『新後撰集』『続千載集』『新続古今集』に計七首入集。

＜和歌＞

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】「高砂の尾上の鐘」と詠まれたのも、もう昔のことになってしまい（鐘の音は聞こえてこずに）、今では松の梢を吹き抜ける嵐の音が聞こえてくるだけだよ。

【作者】高階。正嘉元年（1257）―応長元年（1311）。邦長（本詩歌合

五、六番に出詠）男。従二位。文永三年（1266）遠江守、弘安九年（1286）宮内卿、正安四年（1302）大蔵卿。『新後撰集』に二首、『玉葉集』『続千載集』『新続古今集』に各々一首、計五首入集。一色切（『顕注密勘』切）の伝承筆者。

web公開に際し、翻刻は省略しました

<漢詩>

【平仄】●○○●○●●　●●●○●●支

[redacted]

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】既にもう私の忠節は三代の天皇に及ぶようになった。老いというものは白髪混じりの髪から始まるのであろう、私の左の鬢には白髪が混じるようになってしまった。

【作者】七番詩注参照。

<和歌>

[redacted]

【通釈】佐保姫の染めた緑の色が変わっていく、秋が深まるにつれて「あおやぎ」といわれた緑の柳も色あせていく。

【作者】七番歌注参照。

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

<漢詩>

【平仄】●●●○○●●　○○●●●○支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】四十歳の老境に入った私の想いは物寂しく風が吹き抜けるように冷え冷えとしている。代々伝わる家の業である学問

は継承されている。

【作者】藤原。安貞元年（1227）－正安三年（1301）。藤原経範男。文章博士。実範以降多くの文章博士を輩出した南家藤原氏の出自であり、祖父孝範・、父経範も共に文章博士。弘安六年（1283）文章博士。弘安八年（1285）式部権大輔、弘安十年（1287）大学頭。正応元年（1288）非参議従三位、正応五年（1292）正三位、永仁三年（1295）従二位、永仁四年（1296）式部大輔、正安元年（1299）式部大輔兼左京大夫。『鳩嶺集』に詩文摘句十六句、連句四句を遺す。

＜和歌＞

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】ほのかに空が白んできた明け方に、山の端から離れて月が沈まないで残っているよ。

【作者】醍醐源氏。生没年未詳。兼康男。父・弟邦長（本詩歌合五、六番右に出詠）・子清兼共に勅撰歌人。長舜（『新後撰集』『続千載集』撰集時の和歌所開闔・連署、『続後拾遺集』の連署を勤める）

とは従兄弟。正五位下土佐守（『尊卑分脈』）。『新後撰集』以下には「朝臣」と記されるので四位に昇ったと思われる。『続拾遺集』『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』『続後撰集』『新千載集』『新後拾遺集』に計十四首入集。

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

<漢詩>

【平仄】●○●●●○●　○●●○●●支

[redacted]

【通釈】白雲に雁が点の如く映じて、数行の字のようだ。秋の

web公開に際し、翻刻は省略しました

【作者】九番詩注参照。

<和歌>

[redacted]

【通釈】吹く風よって露が乱れているのであろうか。露を玉として貫いている野辺の蜘蛛の糸では（糸の緒が弱いために）。

【作者】九番歌注参照。

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

<漢詩>

【平仄】○●●○○●●　●○○●●○支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】松の生えた嶺に月が昇って照らし、青々とした美しい山として鮮やかに見える。門のような岩の切り立つ谷では嵐がやんで谷川のせせらぎの音だけが残って聞こえる。

【作者】源則任か。『尊卑分脈』によれば、醍醐源氏で、則長男、丹波守・左衛門尉・右馬頭の職歴が見える。また、『鎌倉遺文』所収の一条家経家の文書にその名前が見出されるので、一条家の家司であったと思われる。

<和歌>

【通釈】（時雨に濡れれば木の葉は色づくというが、その）時雨にも、つれない態度で色を変えない松の葉であるが、そこに、夕日の光が映って、その色が残っていることだ。

【作者】中原行実か。『続古今和歌集目録＜当世＞』によれば、『続古今集』竟宴の時点（文永三年（1266））で、「左衛門尉筑後守」である。また「前備中守行範男」であることも確認できる。『中原氏系図』等に見出せず、詳細は不明。

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

＜漢詩＞

【平仄】●○●●○○●　○●○○●●支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】緑の雑草に露が混じり、そこに（それに見紛うばかりに）蛍の光が輝いている、紅の蓼が水に映り波を燃やしているようであり、そこに白鷺の白い頭毛が垂れている。

【作者】十一番詩注参照。

【付】上句は、「丹蛍」を露に見立てていると解釈することも可能であるが、下句との関連から、見立てとはとらない。

＜和歌＞

[redacted]

【通釈】荒れはてて見窄らしくなった古里の軒端にかかっている蜘蛛の糸であることよ。

【作者】十一番歌注参照。

[redacted]

web 公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

＜漢詩＞

【平仄】○●●○○●●　○○○●●○支

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】めでたい穀物があり、また雨も止んだ。皆、楽しもう。不安定であった飛蓬も、風が静まり、飛び回らなくてもよいのだ。（これらは全て政事が安定しているからだ）。

【作者】菅原在守。『尊卑分脈』によれば、在章の男、在匡の弟で「侍読後宇多御書所開闔／東宮学士」、「大内記　式部少輔／従四下」であるが、『菅儒侍読年譜』によれば、「十五　在守〈在匡男〉後宇多院文永十一年正月廿六日侍読、于時正五位下行大内記兼因幡権介、受禅日聴昇殿」とあり、やや記事に齟齬がある。『鳩嶺集』に摘句が残る。

【付】当該句の上句、解釈が困難である。或いは「有注」部分に本来、自注があり、それによる解釈が要求されたものか。であれば、「有注」は、自注であったことにもなるのであるが、如何。下句は、「飛蓬」が、「風」が静まったために、安定することが詠まれているのであるから、上句でも、「嘉穀」と「雨」とに何らかの因果関係が予測されるのであるが、例えば「雨穀」という言葉がある。これは『芸文類聚』巻八十五・百穀部「穀」に『論衡』を引いて「建武三十一年、陳留雨レ穀蔽レ地、視レ穀形若レ粢而黒、比夷狄地生レ穀也、夷狄不レ食レ穀、生二於草野一、成熟委二於地一、遭二疾風一、与レ之俱飛、風衰、穀二集中国一、中国見レ之、謂二天雨穀一也」とあるように、穀が降ることをいい、当該句の場合には不適切であろう。また「陰陽不レ違、風雨有レ節、五穀垂レ穎、百果共滋」（『三十五文集』「天台長講廻向文」紀長谷雄）の例は、「風雨」が定期的であることと「五穀」が実ることが並列に扱われ、ともに天下が治まっていることを示している。当該句もこの例に準じるものか。しかし「雨余」が、どのように「嘉穀」に機能しているか明らかではない。或いは「有注」に、降り続いた雨が止んだことが記され、それが、徳（この場合は、主催者であろう一条家経のものになるが）であることが注されていたのであろうか。しかし、この場合も、下句との対句関係が不明確になる。

〈和歌〉

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】有明は、（長いはずの）秋の夜であるのに程も無くやってきた。もう月も山の端遠くに残っている（夜の月を満喫しないうちに夜も明けてしまった）。

【作者】「舟行即事」道雲か。井上は、本詩歌合と『摂政家月十首歌合』との親近性から、『月十首歌合』参加の道雲を、本詩歌合の法印に比定している。なお『月十首歌合』の道雲については、早くに安井久善『藤原光俊の研究』（笠間書院・昭和四十八年）で、徳大寺実定男か、と推定されているが（事実、『尊卑分脈』に

よれば実定男に道雲という人物がいる）、実定は、建久二年（1191）年、五十三歳で薨去、道雲が、この年の生まれとしても、本詩歌合の成立期である建治元年（1275）には、八十五歳と高齢であり、年齢的に別人を想定する必要があるか。

web公開に際し、翻刻は省略しました

＜漢詩＞

【平仄】●○○○○○●　○●●○○●支

【通釈】月は、大空にあるすぐれた天子の鏡と同じであり、霜

は、越渓寒女（が宮中献上用の織物）の糸を憐れんでいる。

【作者】十三番詩注参照。

【付】当該句、上句と下句の対の均整がとれていない。上句の鏡は月の見立てであるが、下句の糸は、霜の憐れむ対象である。また下句は不明な点が多いが、現時点ではこれ以上明らかにできない。

＜和歌＞

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】置く露は、夜も更けるとともに、繁くなって野一面の草場にあるが、その草場から（露に宿った）月を貫く蜘蛛の糸で

あることだ。

【作者】十三番歌注参照。